

令和7年度版「学力向上ポータルフォリオ(学校版)」【浦和別所小学校】

⑥	次年度への課題と学力向上策
知識・技能	授業終わりのふり返りや個別課題の設定、書き込み式ドリルや学習アプリ、学習スペースの活用、一人ひとりの課題に合わせた学習については、次年度も継続して取り組んでいく。また、これまで行ってきた一斉授業形式の授業に加えて、単元自由進度学習等の授業形式を取り入れることで授業改善に努める。さらに家庭との連携も図りながら、児童が主体的に学ぶツールや学びかを選択できるようにしていく。 教職員は積極的に1人1台端末を活用し、学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を意識した児童主体の授業を実践できるようにする。また、授業実践の成果と課題を共有するための環境整備を行う。
思考・判断・表現	例年学校平均値では高い水準を保っているが、個に応じた支援や児童主体の学習活動を一層充実させていく必要がある。面談等の対面による直接的な関わりと、直接的な関わりを支える「スクールデジタルボード」等のデジタル学習基盤を活用した間接的な関わりによって、児童の実態把握に努め、児童の発達を支援していく。また、児童にとって必要感のある課題設定、主体的に解決する場面の設定について、次年度の学校課題研究における視点の一つとして取り組んでいく。

①	今年度の課題と学力向上策	
	学習上・指導上の課題	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」 算数「変化と関係・データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた支援や児童主体の学習活動を充実させていく必要がある。	⇒ 授業終わりにふり返りを行うことで、自ら課題を設定する【毎時間】。 書き込み式ドリルや学習アプリ、学習スペースを活用し、一人ひとりの課題に合った学習を進めることができるよう指導していく【週に1度】。 1人1台端末を活用し、学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を意識した児童主体の授業を行い、成果と課題を確認する【1ヶ月毎】
思考・判断・表現	<学習上の課題> 国語「話すこと・聞くこと」 算数「変化と関係・データの活用」 <指導上の課題> 個人差が大きい。個に応じた支援や児童主体の学習活動を充実させていく必要がある。	⇒ ICTを効果的に活用し、児童の「わかった・できた・楽しい」を引き出す。 また、魅力ある導入や必要感のある課題設定、解決の見通しをもって自力解決する場面の設定を行う【毎時間】。 根拠となる部分を引用して自分の考えを具体的に書くために、グラフ等の資料を用いる際、「誰が」「どのような視点で」「どのような単位で」などを意図的に問う。【関係単元毎】

⑤	評価(※)	調査結果 学力向上策の実施状況
知識・技能	A	年間を通じて、学習内容の振り返りとそれを生かした本時の課題設定についてはおおむね定着している。また、書き込み式ドリルやドリルパークの活用、学習スペースの利活用を通して、一人ひとりの課題に合った学習に取り組ませることができた。学年によっては自由進度学習などを取り入れながら、どのツールでどのように学ぶかを児童が主体的に選ぶことができるようになってきた。年間を通じて、積極的に1人1台端末を活用し、学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を意識した児童主体の授業を行うことができた。
思考・判断・表現	B	年間を通じて、話を聞くことを主眼に置いて指導を行うことができた。評価規準を児童に示すことはおおむねできているが、学校全体で継続して実施できるようにしていきたい。また、どの学年でもICTを効果的に活用した授業を行うことができている。R7さいたま市学習状況調査「ICTを活用した学び」の質問に対する肯定的な回答の割合は、全学年で向上傾向にある。児童の「わかった・できた・楽しい」を引き出し、魅力ある導入や必要感のある課題設定、解決の見通しをもって自力解決する場面を設定することができた。

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)

②	全国学力・学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	国語・算数・理科のすべての問題で、全国平均正答率を上回っていた。国語「学年別漢字配当表に示されている漢字を文中で正しく使うことができるかどうかをみる」問題の正答率は87.4%と高いが無回答が2.8%であった。算数「数直線上で、1の目盛りに着目し、分数を単位分数の幾つ分として捉えることができるかどうかをみる」問題の正答率が53.3%、無解答率が5.6%と課題がみられた。平均正答率では、全国や埼玉県を上回っているものの出題の意図を捉えられていない解答も見られることから、引き続き個に応じた支援や児童主体の学習活動を充実させていく必要がある。
思考・判断・表現	国語・算数・理科のすべての問題で、全国平均正答率を上回っていた。国語「目的に応じて、文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかどうかをみる」問題の正答率が65.4%、無解答率が11.2%であった。算数「目的に応じて適切なグラフを選択して出荷量の増減を判断し、その理由を言葉や数を用いて記述できるかどうかをみる」問題の正答率が42.5%、無解答率が0.9%であった。また、理科「赤玉土の粒の大きさによる水のしみ込み方のちがいについて、結果を基に結論を導いた理由を表現することができるかどうかをみる」問題の正答率が62.6%、無解答率は4.2%であった。3教科に共通して、記述式の問題形式で正答率が低い傾向がみられた。

①結果分析(管理職・学年主任等)

②詳細分析(学年・教科担当)

④	さいたま市学習状況調査結果について(分析・考察)
知識・技能	全ての学年・教科において、市の平均正答率を上回っていた。昨年度課題が見られた算数「変化と関係・データの活用」については、授業終わりのふり返りや個別課題の設定、書き込み式ドリルや学習アプリ、学習スペースの活用、一人ひとりの課題に合った学習を進めてきたことで、同一集団経年比較で正答率の上昇がみられた。昨年度の課題として指導を継続してきた成果であると考えられる。課題を確実に把握して指導につなげることを引き続き大切にしていく。また、学校の平均正答率で市の平均正答率を上回っているものの依然として個人差がみられるため、引き続き個に応じた支援や児童主体の学習活動を充実させていく必要がある。ドリルパークや課題克服シート等を活用して基礎的・基本的な知識・技能を強化していくことを教職員間で共通理解した。
思考・判断・表現	教科領域別調査結果においては、一部学年の国語「話すこと・聞くこと」に課題が見られた。しかし、同集団における昨年度との経年比較をみると、結果が向上した学年もみられ、本年度行ってきた授業改善の成果であると考えられる。根拠となる部分を引用して自分の考えを具体的に書くために、グラフ等の資料を用いる際、「誰が」「どのような視点で」「どのような単位で」などを意図的に問うことを教職員間で再度共通理解した。「ICTを活用した学び」の質問に対する肯定的な回答の割合は、小1～小6全ての学年において市の割合よりも高かった。今年度学力向上策で取り組んできたICTの効果的な活用により、児童の「わかった・できた・楽しい」を引き出し、魅力ある導入や必要感のある課題設定、解決の見通しをもって自力解決する場面の設定を行った成果であると考えられる。

③	中間期報告		中間期見直し
	評価(※)	学力向上策の実施状況	学力向上策【実施時期・頻度】
知識・技能	A	授業終わりにふり返りを行うことで、自ら課題を設定した。個に応じた支援や児童主体の学習活動を充実させ、児童書き込み式ドリルや学習アプリを活用し、一人ひとりの課題に合った学習を進めることができるよう指導した。必要に応じて学習スペースを活用した。1人1台端末を活用し、学びのポイント「じ・し・ゃ・く」を意識した児童主体の授業づくりに向けて取り組むことができた。	変更なし
思考・判断・表現	A	どの学年においても日頃からオンラインやCanvaなどを効果的に活用し、児童の「わかった・できた・楽しい」を引き出す工夫がなされており、魅力ある導入や必要感のある課題設定、解決の見通しをもって自力解決する場面の設定が行われている。根拠となる部分を引用して自分の考えを書く活動をより充実させ、学力・学習状況調査でみられた課題の改善につなげている。	変更なし

※評価 A 8割以上(達成) B 6割以上(おおむね達成) C 6割未満(あと一歩)